

# 追放者の矜持 下

ヴァルデマールの絆

マーセデス・ラッキー

訳／澤田澄江

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

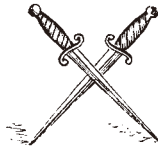
Exile's Honor  
A Novel of Valdemar

by

Mercedes R. Lackey

Exile's Honor ©2002 by Mercedes R. Lackey  
Japanese translation right arranged with the author,  
c/o BAROR INTERNATIONAL, INC.,  
Armonk, New York, U.S.A.  
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.  
Japanese edition ©2012 by Chuokoron-Shinsha, Inc.

挿絵 竹井



目次

第十五章	93
第十四章	75
第十三章	55
第十二章	33
第三部 最後の戦い	
第十一章	9
第二部 テドレル戦争(承前)	
第十六章	118
第十七章	143
第十八章	166
第十九章	184
第二十章	207
エピローグ	223
訳者あとがき	232

ジェイダス

デソール

タラミール

セレネイ

センター王

登場人物  
紹介



ケレン

イルサ

ミステ

ライカ

ジェリチェン

アルベリッヒ



追放者の矜持 下

ヴァルデマールの絆





## 第二部 テドレル戦争（承前）



## 第十一章

酒場の外では嵐が荒れ狂っていて、しばらく誰も出入りしないのは確実だった。軒の樋から雨水が溢れだし、庇に滝のように激しく落ちていく。雨樋はさらにひどく、間欠泉のごとく雨水が噴出し、石畳に激しくほとばしっている。気温が急激に落ちこんだせいで外は肌寒く、雨が氷水に感じられた。

店の中では、足止めを食った者たちが酒の残りをちびちびと飲みながら、もう一杯注文しようか思案している。あるいは、美味しい鳩の肉包み焼きか、柔らかい羊肉をひと切れ頼むか……。宿屋の主人は、

客からの注文を見こんで、季節外れではあったが、温炭酸水のやかんを火にかけた。香辛料の香りが漂って客の注意を引き、食欲を刺激する。

思いがけず心地よい場所だ。小さく焚かれた火だが、冷気を追いだすのに十分だった。アルベリツヒが最後に訪れた酒場の雰囲気とは、かけ離れている。アルベリツヒは《共に歩むもの》の鈴亭の裏手にある秘密の部屋から出てきたところを、一日中降りそうだった雨につかまったのだった。彼がここに足止めされたのも、さらに腹が減っているのも確かだった。それで気を取り直して、《使者》とその招待者のみが入れる小さな個室を利用する気になったのだった。

腹が減っているのは当然だ。夕食前に《学院》を出たのだし、《腕の骨折れ》亭などで出されるものは食べない。この便所の衛生状況を詳しく知りたいたと思わなかったとしても、口に入れたものを腹が拒否した途端に、知ることになるはずだ。《学院》

内の水洗便所は素晴らしいが、そこでさえ長居する  
ような場所ではない。

今夜はもう、人を観察するのはごめんだ。今はただひとり、心地よい場所に腰掛けて嵐を眺めていた気分だった。あの秘密の部屋で、彼は〈使者〉の衣装からこの街で扮している五、六種類の人格のひとつへと着替え、それからふたたび〈使者〉に戻って出てくる。すると、〈学院〉に居るときのよう  
落ち着くのだった。

彼が扮するのは、けちな殺し屋や、怪しげな評判のごろつき、剣の売人といった悪漢ばかりではない。まともな者になることもあった。輸入物の短剣を売る小商人に、馴染みのない神の信奉者。その教団はとて小さく、誰も耳にしたことがない。存在しないのだから、当たり前なのだが。さらに、隊商の誠実な護衛……。

実のところ、彼はほとんどの時間を、街の治安官や衛兵には非常に馴染みがあっても、〈使者〉は決

して近寄らないような場所で過ごしていた。収穫を得ることはめったになかったが、それでも自分の仕掛けた罠に何かがひっかかるのを辛抱強く待ち、ひどい安酒しか飲めない酒場で、多すぎるくらいの間を過ごしていた。ときには、とんでもなくひどい醸造酒を出されることもあり、カース国の指揮官だったのがばれたのかと思うこともあった！ 確かに、飲める酒ではあった。安っぽく、すぐに酔いつぶれてしまうほど強い酒だったが、それでも飲める代物だった。

今夜も、そんな何事も起こらない夜を過ごしてきたところだ。このあとも、何も起こりそうもなかった。ちょっとした喧嘩のひとつやふたつはあるかもしれないが。嵐の予兆は、人々が「家」と呼ぶ狭苦しい自分だけの小さな場所を離れるのをためらわせた。着替える服のない者たちは、雨に降られてしまったら背中が乾くまで震えていなければならぬ。酒場の席は半分も空いていたし、彼の情報屋はひと

りとして姿を見せなかつた。西の空が、稲妻いなすまでちらちらと光るのが遠くに見えて、彼は諦めたのだつた。雨が降りだす前に〈学院〉に戻りたかつたのだが、どうやらついてなかつたようだ。

それとも、実はついていたのか。

〈鈴〉亭は〈使者〉がよく訪れる場所なので、ここにおいても人目を引くことはない。酒場に入るとき、アルペリツヒは彼の目印である灰色の革服ではなく〈白衣〉を着ていた。そうすれば、ここをよく訪れるほかの〈使者〉に紛れられる。ときに〈使者〉は、ふと〈学院〉を離れたくなつて、大ジョッキや一杯の葡萄酒ぶどうしゅを頼み、給仕女と無邪気たむに戯れたりする。そののどがいけないだろうか？ タラミールが常々彼にいい聞かせているように、〈使者〉もただの人間なのだ。

また大勢で訪れて、仲間と飲む者たちもいた。〈宮廷〉には、五人ほどの人数が集まつて、卓に足を投げだして、大声で気ままに話のできる広い場所がな

い。食べ物食べ物は欲しいときに手に入れられるが、一度に多くの者に出せるようなものになりがちだ。たまには食べたいものを注文したくなる。

宿屋の主人は彼を〈使者〉の特別室に通すと、窓際の席に案内した。そこから、頻繁に稲光がして、止む気配のない雨が降っているのが見える。しばらくして、給仕の少女が温かい鳩肉の包み焼きと一緒に、主人の奢りおごで苦い麦酒エールを大型のジョッキで運んできた。もちろんカースのものではないがよく似た味わいで、山岳地帯の刺激の強い醸造酒とは違い、美味かつた。

椅子の背もたれが高く、ほかの席からの視界はほぼ遮さえぎられてゐる。いずれにしても、部屋には誰もいない。この天候なら、誰も入つてこないだろう。部屋の出入り口には扉がなく、一般の客室からは、蜜蜂はちまが巣箱ばちばでぶんぶんぶんと音を立てているかのような低い鼻歌が、雷とんがらの轟とんがらきの合間に聞こえてくる。建物の中と外は、あまりにも対照的だ。こういつた嵐にな

ら、カースの山間でよく遭遇した。だが、彼は今、心地よい部屋にいて、心地よい椅子に座り、温かい食事を前にしている。部屋には温炭酸水の香辛料のおいさが漂っている。こんなことは初めてだった。

幼い時にも同じような風に何度もあつていた。部屋の真ん中の炉辺ろべの、煙をはいて燃え盛る火のそばに縮こまつていた頃のことだ。天井は何箇所も雨漏りがしていて、屋根の中央にある煙突からは、さらに多くの雨水が滴つていた。風に煽あおられて雨戸ががたがたと鳴る。母親は彼をそばに引き寄せて、火を絶やさないうようにと、よく乾いていそうな木切れを慎重にくべていたのだろう。寺院にいた頃の風の記憶はない。木造の頑丈な建物の屋根が、今にも風で飛んでしまうのではないかという恐怖心を抱いたことは一度もなかったのだ。

彼がもつと大きくなり、宿場の手伝いをするようになった頃には——そうだ、彼は馬小屋にいて、馬を宥なだめる手伝いをしていた。扉を閉めておくのに奮

闘し、雨漏りを受け止めようと走り回る。もしくは、嵐のさなかに外に出て、物が飛ばないようにしっかりと押さえたり、部屋に物を運びこんだりする。すぐ近くに雷が落ちようとも——たとえ、ものすごく近くだったとしても！——気に留めず、冷たい雨にずぶ濡ぬれになつていた。

士官学校は谷間にあつて、このような嵐は起きない場所だった。それでも、騎兵隊にいたときには——ああ、嫌になるほど経験した。たいていは、開けた土地にいた。自分の天幕が最初に立てられるよう期待し、それから、手元の毛布をすべて肩にかけて包くるまり、帆布はんぷの端から流れ落ちる雨の滴しずくを眺めながら、今夜も冷えた夕食になるのだろうと考える。身を隠せない場所で嵐に出会つてしまうと、状況はさらにひどかった。せいぜい谷間に下りていって、できるだけ枝の込み入った低木の木立こたちを見つけ、その下に潜もぐりこむ。馬からは下りておく。どんなに訓練された馬でも、雷に驚いて駆けだすことがあるか

らだ。天幕の帆布を雨具代わりに使ったりもした。それでどうにか最悪の雨を凌げるよう祈る。頭を低くして立ち、片手で馬の手綱を鼻の近くで掴み、もう片方の手は顎の下で帆布をしっかりと握りしめる。馬も自分も寒さに震えながら。

それに比べたら、遥かに心地よい。ヴァルデマールに来てからずっとそうであったように。だが、満たされてはいなかった。問題は自分自身にあるのか、それともヴァルデマールにあるのか、彼には定かでないかった。

誰もいないというだけでも、彼は嬉しかった。自分の思いに耽かひていられる。このところひとりきりでいられることなど、めったになかった。

「逃がしてしまったそうね」誰かがすぐそばでいった。

女の声だ——良く知っている。だが、誰の声か即座に出てこない。その言葉に、すっかり驚いてしまっていた。

「は？」とだけ、彼は答えた。ひとりの時間を邪魔するのは誰だと振り向きながら。

「鰻うなぎよ」へ使者——もはや〈訓練生〉ではない——ミステが言葉を足した。眼鏡のレンズが、稲妻を反射して光る。彼女は何の断りもなしに向かいの席に座った。「しかも小さな鰻」くすくす笑いながらカース語でいう。

給仕の少女はミステの食事を運んできてアルベリツヒの向かいに置くと、ふたりを残してさっさと一般客の部屋へ行ってしまった。

「ああ」彼はやや狼狽ろうたふしながら、眼鏡の奥を覗きこんだ。「セレネイと話をしたのか」

カース語で話すとはっとする。彼はいまだにヴァルデマー語に苦労していた。流暢りゅうちやうに話せるようになるまでには、何年も、何十年もかかるだろうと思うと、気が滅入ることもあった。彼のカース訛なまりに気づく者などいないとは思いつつ、身分の低い人物を演じて無口を装うことでなんとかしのいできた

のだ。

「それもわたしの仕事の内よ」彼女は答えた。「この仕事を得られたのはあなたのおかげだわ。わたし——エルカースと一緒に訓練を受けるようにいわれたの。それから、セレネイと街の裁判所で副判事としての研修を受ける。エルカースの助手になったのよ。彼にいわせれば、一、二年のうちに、〈使者年代記者〉になれるそうよ」

「それはよかった」彼は心からそういった。「それで、おれが釣りを知らなかったと、年代記に記されるのか?」

「まさか! 話にのほっただけよ。わたしは相手をひたすらしゃべらせるの。物事を知るには、それが一番効果的な方法よ」彼女はふいに言葉を止めて、首をかしげた。「あなたもわたしとおしゃべりしない?」

彼は駄目だといおうとして口を開いたが、そのまま閉じた。面白そうだ。「話した内容は、秘密の年

代記に記されるのか?」彼は尋ねた。

「かもしれない。共通の知識とすべきことも、なかにはあるでしょう。わたしの年代記が読まれる頃には、今のあなたが扮している秘密の人格は、廃れていってしまうから」

ということは、自分のしていることを彼女は知っているのだ! 確かに、エルカースの助手ならば、驚くことではない。彼の書いている秘密の年代記を彼女は読んでいる。この酒場にある秘密の部屋の存在を、彼女も知っているに違いない。すると、故意に自分を待ち伏せていたのだろうか。

彼女は二口か三口食べて、食事が冷えてしまうと促したが、彼も食べはじめた。いつもの〈鈴〉亭の食事と変わらず、美味しい。カースでは、鳩肉の包み焼きは珍味だった。カースにいるのは森鳩と呼ばれるもつと大きな種類で、捕まえるのが難しく、鷹狩りの獲物になっている。だが、この街にはいたるところに鳩小屋があり、一般的な岩鳩が兎と同じよう

に飼われている。カース人のご馳走は、兎肉の包み焼きだ。兎の肉を包み焼きにしたり、汁にしたり、串に刺して火であぶったり……。

「わたしはこれで育つたの——」ミステがフォークで皿を指しながらいった。「家の裏庭に鳩小屋があったわ。《学院》には、この味がないのよ」

「ふむ。美味い」彼は同意した。「おれの出身地では一般的ではないが」

「そうね、ここでは——とくに街では——朝のうちに夕飯で食べるものをすべて生地で包むのよ。そして、仕事に行く途中に近所のパン屋に預けて、仕事帰りにパンを買いがてら引き取るの。小さな部屋を借りている人や間借りしている人は、たいていパン焼き窯がまを持ってない。とくに街の人はね。たいていの家は、汁を火にかけるための炉があるくらいで、さちんとした台所がないわ」ミステは反応を期待していないようだった。夕食の続きに戻る。彼も彼女に做った。

「カースも同じようなものだ」彼はいった。「パン屋はないが。パンはたいてい宿屋で焼く。それに、煮込み料理と同じくらい、蒸し料理もする」

彼は母親の働いていた宿屋の厨房ちやうぼうから漂ってくる兎肉の包み焼きの焼けるにおいをよく覚えていた。窯で焼く包み焼きをつまみ食いすると、痛い目に遭う。それぞれの包み焼きにはそれを置いていった家の特別な印が生地につけてあり、宿場の包み焼きには、星の印がひとつ刻まれていた。窯から出されたばかりの熱々の肉包み焼きを四等分したものなど、一度も食べたことがなかった。彼と母親は従業員のなかでも立場が下のほうだったので、そのように扱われていた。

最初に提供されるのは、もちろん客だ。それから宿屋の主人、その妻と子どもたち。それから料理人と馬丁長。この馬丁長は主人の家族が残したもので手をつけていないものがあれば何でも持つていってしまった。それから料理人の手伝い、給仕の少女た

ち、飲み物を出す給仕の少年が続く。さらに厩舎きゆうしやで働く馬丁、宿屋の客室係。そうして、ようやくアルベリツヒとその母親、手伝いの気の毒な幼い少女と、厨房で肉を焼く少年だ。

つまり、彼が手にできるのは、割れた包み焼きの皮、肉汁、それにほんのちよつとの野菜だけだった。もしくは、焦こげてしまったものや、焼きすぎたもの、塩を入れすぎるとして失敗してしまったものなど、とてもまともな包み焼きとは呼べないような代物だ。それでも、十分に食べられるものだったし、それが重要だった。母親が宿屋で床を磨みがく仕事を手に入れてからは、空腹だったことが一度もなかった。宿屋には、古くなつたパンと肉汁ならいつでもあつたからだ。肉から流れ落ちた油と肉汁が、受け皿にたまる。素朴そぼくなものではあつたが、麦の粥かゆもいつでも食べられた。それに、えんどう豆の粥。豆粥は定番料理なので注文が多く、炉床の隅には常にこの鍋が置いてあつた。

えんどう豆の粥は宿屋が提供する一番安い料理だったこともあり、よく売れた。料理人は鍋が半分ほどになつたところで新しく作りはじめた。新しい粥が出せるようになると、最初の鍋は下げられる。宿で働くすべての従業員は、この下げられた粥を好きなきときに自分で椀わんに掬すくつて食べられた。手伝いの少女と、どんなときも炉辺の端で串肉を回して焼いている少年もだ。宿屋の主人は儉約家ではあつたが、食べ物に関しては寛大かんただった。アルベリツヒはその後の数年間で、疲れ果てるまでこき使いながら、従業員を飢うえさせている亭主に何度か出会つたが、そういう者たちとは違つていた。

「ふう」ミステは満足そうに息を吐きながら、食べ終えた皿を脇に重ねた。アルベリツヒも自分の皿を脇に寄せた。

「今からわたしとおしゃべりを始めるといつつもりはないけれどね、アルベリツヒ。ただ、そうしたいときには、いつでも喜んであなたを年代記に付け加



えるわ。それに、あなたがただ話をしたいというときには、聞き手になつてもかまわない。声に出しながら考えてみる、という具合にね。もしくは、単にカーズ語で話がしたいときにも」

彼はわずかに微笑んだ。「きみの好奇心に終わりが無いことは知っているが、それでもきみの忍耐強さには感謝する」

「わたしの好奇心は、今では常に満たされてるわ」ミステが応じた。「エルカーズの助手になる前は、決して満たされることがなかった。わたしは知りたかつたのよ、何が起きたのかではなく、なぜ起きたのかを。そのせいで、気がおかしくなりそうなきもあつたわ。なぜあれこれの法律が作られたのか。なぜあなたの祖国の人々とずっと敵対しているのか。なぜ——つて。こんな風に、答えよりも常に疑問の方が多いの。今のわたしは、たいいてい自分のなぜに答えを見つけられる。重要なのはね、そうする権利を得て、推奨すいしょうされているってことなのよ」彼女は

にこりと微笑んだ。眼鏡のレンズがきらりと光る。「たぶん、これこそわたしが〈選ばれ〉た理由なんだけわ。ほかには見当がつかないもの」

彼は声を出して笑った。「きみが〈訓練生〉だったときのおれの苦悩の種は、それが理由だったのか。指示されると、いちいち理由を聞いてきたのは？」

彼女は肩をすくめた。「わたしはなぜ命令されたのかわからなければ、命令には従わない。そういう意味で、わたしはすぐく運がいいし、とても恵まれていたと自分でもわかっている。こんな特別な贅沢ぜいたくを、たいいていは享受きょうじゆできないもの。たいいていのは、疑問に思うことなく命令に従うか、あるいは答えを求めることで不快な思いをするでしょう」彼女は、右手の中指の脇にできている小さなペンだこを何気なく親指でさすった。何時間もペンに押されて硬かたくなっている。

彼は領きながらも、彼女は彼の過去をほのめかしているのだろうかと疑った。

「〈宮廷〉にいる時間が長くなるほどに、それがはつきりしてきたのよ」彼女は話を続けた。「事務員だったとき、わたしは自分の仕事の意味を理解していた。はつきりしていたわ。無意味な仕事だったかもしれない。でも、はつきりしていたのよ」彼女は彼を横目でちらりと見た。「いい？ あなたも事務員になるといいわ。そうすれば、いかに人々が些細なことで大騒ぎしているかがわかるから。人が心に抱いているかもしれない大量の敵意なんてものは、書き留めてしまわないと死んでしまうわよ。まったく！」

「何に？ 手紙にか？」彼は尋ねた。

「いいえ。手紙にはふつう自分の皮肉を書くものだわ。この国は識字率が高いのよ、アルペリツヒ。君主の命令で、子どもたちには読み書きと計算の授業が義務づけられているの。カースの子供たちが宗教教育を寺院で受ける義務があるのとちょうど同じ。違うの。わたしは法的文書のことをいつているのよ。」

法的文書はたいい事務員が扱うわ。わたしのような事務員がね。お金に関することを扱う事務員もいるけれど、わたしは計算にちつとも向いていない。わたしは、たくさんの遺言を扱ったわ」彼女はため息をついた。「ほんとうに、たくさんの遺言を。それに、宣誓証書も。それから訴訟に関する資料。あなたはセレネイ王女の護衛をしているのだから、〈宮廷〉においては、誰かが死んだときにどんなことが起きるかは見えてきたでしょう！」

ふたたび、アルペリツヒは頷いた。「だが、当事者にとっては重大だ」

「当事者には重大だという理由で、暇をもてあましている人もいるわ」不快そうにいう。「まるで王国の運命がかかっているかのように、亡くなったおばあさんのとっておきの寝台の掛け布のことで争う。すべての〈使者〉が南へと向かっているというとき——」

彼女は最後までいえなかった。座ったまま、頭を

振る。

セレネイは〈訓練生〉のときは助手として、今は主判事として法廷の席に座っている。そのときに観察したことを、彼はひとつひとつ思い返した。「おれにも理解できない」それから、面白半分<sup>まぶし</sup>に付け加えた。「そもそも、何かが自分にとつてそれほど重要になるほど、物を所有したことがないんだ」

彼女はそれを聞いて吹きだした。「ところが、わたしは持ちすぎなのよ！　こそ泥み<sup>どろみ</sup>たいに何でも集めてしまうの！　本当は理解<sup>りかい</sup>すべきなんですよ。ね！　だけど、わたしの持ち物はほとんど本なのよ。だから、やっぱり誰かが数ペンスやひとそろいの銀飾りのために、どうしてあんな風に争うのか理解できない」わずかながら見下したような口調でいう。

「それで、もしも争っているのが亡くなったお婆<sup>おば</sup>さんの蔵書<sup>くらみ</sup>だったら？」彼は抜け目なく尋ね、その傲慢<sup>ごうまん</sup>な態度に釘を刺した。

彼女はすぐに理解して——勇敢にもその打撃を受

けとめた「あなたのいうとおりよ。わたしも強欲<sup>きやうよく</sup>ね」そういつて笑う。「ほら、見て。雨が弱まってきた！」彼は窓の外をちらりと見た。彼女のいうとおりだ。土砂降りだった雨がいくらか弱まっている。稲光も遠方に移動していた。「すぐ小降りになりそうだ」彼女が席を立とうとしたので、彼は忠告した。

「そうね。だけど帰るわ。戻らないといけないの。〈訓練生〉を何人か面倒<sup>めんどう</sup>を見ているのよ」彼女はそういつて立ちあがった。彼は、彼女にもっと居てほしいと思つていることに気づいた。立ち去らないよう手を掴みたい衝動を抑える。彼女は何かを感じたように、彼のほうへ向き直った。

「アルベリッヒ、その、わたしのおしゃべりのことだけど」彼女はいった。「わたしは、個人的なことは年代記に記さないわ。それが何か起きるきっかけになつて、しかもその何かがとても重要でない限り。あとね、アルベリッヒ？」

「なんだ？」何かが、ふたりの間に流れた——いや、

流れていた。彼はそれを認識することも、理解することもなかつたが、彼女が彼をじつと見つめる。彼はその眼鏡の奥の瞳が、奇妙に意味ありげなことに氣づいた。

「ジェリとも話してみるといいかもしれない。何といつても、彼はそのためにいるのよね？」奇妙に弱々しい笑みを浮かべる。「つまり、それも彼の仕事だと思ふの——話を聞くのが」

氣になる言葉を残して、彼女は出て行つた。

彼はしばらくそこに座つていた。薄暗いなかで、この会話によつてなぜ——ジェリと話すことが重要だ、という印象を受けたのか不思議に思ひながら。

(彼女も〈使者〉だからか?) カンターが聞いた。

彼はほかの誰からも、タラミールからでさえ、そのような奇妙な印象を受けたことはなかつた。(いや、そうじゃない。彼女は〈共鳴者〉ではないだろう?)

(わたしの知る限り、違う) 〈共に歩むもの〉は考

え深げにいつた。(だが、彼女はちよつと奇妙な〈天恵そしつ〉を持つてゐる。彼女は相手がそばに居さえすれば、〈真実の呪文〉をかけずとも、本当のことをいつてゐるかがわかる。彼女が街の法廷に出てゐるのは、そういう理由からだ)

面白い。だからこそ彼女は多くの人から話を聞きだせるのだらう。彼女があればどこまでに物事の「なぜ」を追求するのは、そのためかもしれない。真実か嘘うそかがわかるなら、人は真実を見つけることの次に、その真実の裏にある理由を見出みいだそうとする。

真実を知りえたら、話を聞くだけでなく、話したいとも思ふだらう。

(おれも戻つたほうがいいか?) 彼は尋ねた。(共に歩むもの) は多少なりとも、常に互いに連絡を取り合つてゐるようだ。何か知つてゐるかもしれない。カンターが即答した。(いや。それに、おまえに急ぐ用事がないならば、わたしはこの心地よく乾燥している厩舎にとどまることに異論はないぞ。し

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。